

独思録：「鳩山首相国連デビュー」(9/27)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

9月26日の天声人語(注)「ひとりで見ると夢は夢でしかないが、一緒に見ると夢は現実だ。」とオノ・ヨーコさんの深い言葉を紹介し、さらに続けて「ならば人類共通の願いがかなわぬ道理はない。こと核廃絶については、いい意味で青臭く、突っ張るハトであれと願う。」と結んでいます。さすがコラムのプロの言い回しと感じ入りました。

今回の鳩山首相の国連、G20をはじめとする、外交デビュー、そこで海外に向けてはなしたチェンジ日本の夢、本来夢を見て各分野において新技術を生み出して欲しい、財界と一緒に夢を見てくれるのでしょうか。

古人曰くではありませんが、夏目漱石のエッセイに、『夢十夜』というのがあります。その「第七夜」に、

「何でも大きな船に乗っている。

…… <中略> ……

自分は大変心細くなった。いつ陸(おか)へ上がれる事か分からない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただ黒い煙(けぶり)を吐いて波を切って行く事だけはたしかである。その波はすこぶる広いものであった。際限(さいげん)もなく蒼(あお)く見える。時には紫(むらさき)にもなった。ただ船の動く周囲(まわり)だけはいつでも真白に泡(あわ)を吹いていた。自分は大変心細かった。こんな船にいるよりいっそ身を投げて死んでしまおうかと思った。

乗合(のりあい)はたくさんいた。たいていは異人のようであった。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇って船が揺れた時、一人の女が欄(てすり)に倚(よ)りかかって、しきりに泣いていた。眼を拭く手巾(ハンケチ)の色が白く見えた。しかし身体(からだ)には更紗(さらさ)のような洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がついた。…… <後略>」

と、渡航時の不安に対する行があります。

今回の鳩山総理の世界への環境問題や核兵器削減などの宣言、世界から大きな評価を受けましたが、鳩山総理の国連会議登壇時の心境も、

「何でも(国連という)大きな船に乗っている。

…… <中略> ……

自分は、(実現できるかと内心)大変心細くなった。いつ達成できる事か分からない。そうしてどのような成果が上るのだから知れない。ただ今までの考えでは出来そうもないことに向って、国民一緒になって、世界の先頭に立って、波を切って行く事だけはたしかである。その波はすこぶる未知のものであった。際限(さいげん)もなく困難に見える。時には目の前が真っ暗にもなった。ただ船の動く周囲(まわり)だけはいつでも希望に満ちていた。自分は大変心細かった。こんな船にいるよりいっそ身

を投げて死んでしまおうかと思った。

乗合（のりあい）はたくさんいた。たいていは異人のようであった。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇って船が揺れた時、ある国の首脳が欄（てすり）に倚（よ）りかかって、しきりに不平を言っていた。汗を拭く手巾（ハンケチ）の色が白く見えた。しかし身体（からだ）には更紗（さらさ）のような洋服を着ていた。ある国の首脳を見た時に、心細いのは自分ばかりではないのだと気がついた。…… <後略>

であったかもしれません。（鳩の心臓には毛が生えている？）

しかし、「一国で見る夢は夢でしかないが、世界一緒に見る夢は現実だ。」となるよう、世界が揃って環境問題や核兵器削減などの問題解決に向けた夢を見られるよう、日本がイニシアチブを取って行こうではありませんか。



（注）天声人語：「一緒に見る夢は現実」（9/26）

<http://www.esquare-kamakura.net/asahi090926.pdf>

<オノ・ヨーコ（1933-）>

日本名小野洋子、ニューヨーク在住。前衛芸術家、音楽家。レノンとの数々の共作でも知られている。

1953年、学習院大学から米サラ・ローレンス大学に入学、音楽と詩を学ぶ。1959年から、ニューヨークを拠点に、前衛芸術家として活動を開始。

1966年、活動の拠点を、ロンドンに移し、個展開催、その会場でジョン・レノンと出会い、1969年結婚。1960年代後半から1970年代にかけて、レノンとともに数々の創作活動や平和運動を行なう。レノン亡きあとも「愛と平和」のメッセージを発信し続け、世界各地で個展や音楽活動を行なう。

作品に『The John Lennon Family Album』『オノ・ヨーコ 頭の中で組みたてる絵』『グレイプフルーツ・ジュース』『メモリーズ・オブ・ジョン・レノン』など。



<夏目漱石（1867-1916）>

小説家、評論家、英文学者。俳人（俳号は愚陀仏）。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。



大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学）英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちゃん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。

春秋：「国民の幸福感」(9/22)

一国の発展を測る物差しが国内総生産（GDP）一辺倒ではおかしい。休暇や家事、ボランティア活動、環境への配慮などにも価値を認め、生活の質や国民の幸福感も映した新しい指標が必要だ。そんな提案をフランスがしている。

アイデアを携え先日演説したサルコジ大統領いわく、「我々は数字という名の宗教、市場という名の宗教をつくりあげ、それにがんじがらめになってしまった」。さらには「わが国はすべての国際機関に対し統計の見直しを促すための戦いを始める」。世界にもの申してやまぬこの勇ましさ、フランス流ではある。

ヒマラヤの小国ブータンが掲げる国の指標「国民総幸福」(GNH)はよく知られている。フランス版の新指標の提言は「経済力と社会進化の測定に関する報告」に基づく。仏政府の依頼で、ノーベル賞経済学者のスティグリッツ米コロンビア大学教授、セン米ハーバード大学教授らが1年半がかりでまとめたという。

今週の外交の舞台にサルコジ大統領は提案を持参するそうだが、さっそく英国辺りでは「休みが多い国が地位を上げたいのだ」といった茶々が入っているらしい。そういえば、「フランス流の休暇を取る (take French leave)」という英語には「ずる休みをする」との意味もある。さて、各国の反応はいかがか。

<ニコラ・ポール・サルコジ (1955-) >

フランス第五共和政第6代大統領及びアンドラ公国の共同大公。パリ出身。

フランスの大統領としては異色の新保守主義者、新自由主義者とされる。ハンガリー系移民2世。カトリック教徒。

パリ第10大学卒業後、弁護士資格を取得し、不動産を専門とする法律事務所をパリに共同で開設、28歳でイル＝ド＝フランス地域圏議会議員となり、政治家としてスタート。

2007年のフランス大統領選挙で、社会党のロワイヤル候補との決選投票の末、大統領に当選。

シラク政権のイラク戦争反対により冷え込んだ対米関係の改善と、フランス伝統の平等主義を捨て自由競争を重視する英米型の新自由主義経済政策路線の政策をとる。



<ジョセフ・E・スティグリッツ (1943-) >

アメリカの経済学者。インディアナ州ガリー生まれ、アマースト大学、マサチューセッツ工科大学、ケンブリッジ大学で学び、その後、教授として、マサチューセッツ工科大学、イェール大学、オックスフォード大学、プリンストン大学、スタンフォード大学で教え、現在はコロンビア大学教授。

ミクロ経済学などの分野において影響力のある論文を発表し、実際の政策にも多大に貢



献、クリントン政権では、米国大統領経済諮問委員会委員長（1995年～97年）を務めた。

2001年にノーベル経済学賞を受賞。

著書に『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』『人間が幸福になる経済とは何か 世界が90年代の失敗から学んだこと』『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』など。

<アマルティア・セン（1933-）>

インドの経済学者。ベンガルで生まれ。カルカッタ大学経済学部卒業。ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジで博士号取得。

その後コルカタ、デリー、マサチューセッツ工科大学(M.I.T.)、オックスフォード、ハーバード、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)などの大学で教鞭を執る。



1998年、経済の分配・公正と貧困・飢餓の研究における貢献によりノーベル経済学賞、翌年にはインドの文民に与えられる最高の賞であるバーラト・ラトナ賞を受賞。

著書に『不平等の経済論』『集合的選択と社会的厚生』『貧困と飢饉』『合理的な愚か者 経済学＝倫理的探究』『福祉の経済学 財と潜在能力』『経済学の再生 道德哲学への回帰』『不平等の再検討 潜在能力と自由』（『自由と経済開発』『貧困の克服』など。

天声人語：「鳩山イニシアチブ」(9/24)

日本語にしにくい英単語がある。「イニシアチブ」は率先、主唱、主導権などと訳すが、どうもじっくりこない。そういう振る舞いは私たちの柄でないのかもしれない。とにかく「出るクイ」を疎む国民性である。

ゆえに新鮮、かつ胸のすく姿だった。国連の気候変動サミットで、温暖化ガス削減の新目標を打ち上げた鳩山首相だ。前政権の3倍超という野心的な数字は、喝采の中で国際公約になった。

大排出国の米国、中国は牽制（けんせい）し合い、大した約束をしていない。新首相のスタンプレーで国民や企業が不公平に泣くことはないか。そんな懸念もあろう。外交舞台では人気者より、ずる賢い嫌われ者が国益を守ることがままあるからだ。

だが、人類の存亡にかかわる危機は切迫している。主要国のどこかが「地球益」を抱えて駆け出さなければ何も動くまい。そして日本が走るなら、政権交代に世界の目が集まる今である。途上国支援を鳩山イニシアチブと自称したのも、日本の型を破る自己主張だった。

もちろん、欧州勢は絶賛だ。海千山千たちにハシゴを外されないよう用心しながら、これからも得意の「非軍事」で汗をかくのが日本の正道だろう。そうして蓄えた国際社会の尊敬と信用は、いずれ国を救う。目先の、ちまちまとした損得よりよほど意味がある。

この国が、慣れぬ手で握りかけた主導権だ。かくなる上は米中や途上国を動かし、国内の説得に努めるしかない。「格好よさ」に見合う責任が鳩山政権にのしかかる。追従しない外交とは、本来そういうものである。

時事通信：「温室ガス25%削減 首相表明＝鳩山イニシアチブも提唱」(9/22)

鳩山由紀夫首相は22日午前（日本時間同日深夜）国連総会の一環として開かれた気候変動首脳会合で演説した。温室効果ガス削減目標について「世界の中で相対的に高い技術開発力と資金力を持つわが国が率先して目標を掲げ、実現していくことが国際社会で求められている」と指摘。中期目標として「1990年比で2020年までに25%削減することを目指す」と表明した。



麻生前政権が示した「05年比15%削減」（90年比8%削減）より大幅に踏み込んだ目標を事実上の国際公約としたことで、日本は実行へ重い責任が課せられた形だ。

演説で首相は「あらゆる政策を総動員して実現を目指す」として、国内排出量取引制度や地球温暖化対策税などの導入を検討する考えを示した。

ただ、首相は「わが国だけが高い目標を掲げても気候変動を止めることはできない。すべての主要国の参加による意欲的な目標の合意がわが国の約束の『前提』となる」と強調。

12月の国連気候変動枠組み条約第15回締約国会議（COP15）での合意に向け、主

要ガス排出国である米国や中国などの前向きな対応を促した。

首相はまた、途上国支援に関する「鳩山イニシアチブ」として(1)日本を含む先進国の官民資金による貢献(2)途上国の排出削減の検証可能なルール策定(3)資金の透明性、実効性確保のための国際システム構築(4)技術移転に伴う知的所有権保護 - を提唱。日本として「これまでと同等以上の資金的、技術的な支援を行う用意がある」と表明した。ただ、具体的な金額は示さなかった。首相は、オバマ米政権が景気対策と環境技術振興を一体で進めている「グリーン・ニューディール」を評価し「気候変動への積極的取り組みは電気自動車、太陽光発電を含む技術や新規雇用を提供する」と表明。さらに「産業革命以来の社会構造を転換し、持続可能な社会をつくるのが次世代への責務だ」と強調した。



編集手帳：「夢は願望の実現」(9/23)

本もいろいろ、だろう。村上春樹さんの最新長編「1Q84」のように発売から12日間で100万部も売れる本があれば、初版600部を売り切るのに8年かかった本もある。心理学者のジグムント・フロイトが書いた原稿は出版社から見向きもされず、やむなく自費での出版となった。1900年のことで、著者みずから知人を頼りに売り歩いたと伝えられる。

その著書「夢判断」が“無意識”という未知の領域を照らす不朽の一冊になったことを思えば、書物の一生も人生と同様にさだめがたい。精神分析の始祖が死去したのは70年前のきょうである。

落語「夢の酒」に、浮気する夢を見た亭主をやきもち焼きの女房がなじる場面があった。「ふだん、こういうことがあったら面白かろうと置いていらっしやればこそ、そんな夢をご覧になる」のだ、と。フロイトの説 夢は願望の実現である そのままで、折に触れて何かと思い出されることの多い先生である。

秋の彼岸、寝苦しかった暑さもいつしか消えている。亡き父母に、亡きわが子に再会したいと、願望の実現を夢に託して眠りにつく人もいるだろう。

<村上春樹(1949-)>

小説家、エッセイスト、翻訳家。京都府京都市に生まれ。早稲田大学第一文学部卒。

ジャズ喫茶の経営を経て、1979年『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞しデビュー。

1987年発表の『ノルウェイの森』は上下430万部を売るベストセラーとなり、これをきっかけに村上春樹ブームが起き、以後は国民的支持を集る。

日本国外でも人気が高く、現代アメリカでも大きな影響力をもつ作家の一人。

2006年、フランツ・カフカ賞を受賞し、以後ノーベル文学賞の有力候補と見なされている。

主な作品に『羊をめぐる冒険』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『1Q84』など。



余禄：「レモンの木」(9/24)

ドアを開けるとさわやかな秋の風。だが、どこかに冬の気配がする。玄関先のレモンの鉢は、若葉が開かずに縮れたままだ。「きっと夏の間の日照がたりなかったからでしょう」と花屋の店員が言っていた。

去年の夏はサンショウの小鉢にアゲハの幼虫がついて葉を食べ尽くしてしまった。サナギになって羽化するまで食草探しに思わぬ苦勞をしたと本欄に書いたら、多くの読者からありがたい助言をいただいた。虫と植物の間に立って知恵を絞っている人が大勢いる。うれしいことだ。

「卵を見つけて数を減らす。生まれた幼虫は育てる」というご意見があった。なるほどそうだと思って、花屋で見かけたレモンの木を買い込んでおいた。観賞用の小さな木だが、幼虫の一匹や二匹は育てられるだろう。

ところがアゲハは産卵にこなかった。卵がついてないかと思張っていたのに肩すかし。そのうち、総選挙だ、政権交代だと騒がしくなった。9月の初め、気がつくとも黒い小さな虫がレモンの葉の上にいた。大中小と合計5匹も。

インターネットで調べた。「秋の幼虫はサナギで越冬する」という。冬の寒さを生き延びたものだけが春の空に舞うのだ。寝袋というにはあまりに薄い殻の中にもこもる準備をしているのに、いまさら何匹か捨てるなどできない。全部がサナギになるまで葉っぱが足りるよう祈るばかりだ。

「サナギには週に一度霧を吹きかける」とも書いてある。そんなに手間がかかるのか、やれやれ。「あわれ秋かぜよ、情(こころ)あらば伝えてよ」と佐藤春夫の詩が浮かぶ。北風に伝えてほしい、レモンの鉢に鈴なりの、栄養不足のサナギを見たらやさしく吹いてやってと。

< 佐藤春夫 (1892-1964) >

小説家、詩人。和歌山県東牟婁郡新宮町(現・新宮市)生まれ。慶應義塾大学文学部予科中退。

1909年(明治42年)から『スバル』『三田文学』に叙情詩、傾向詩を発表し、注目を集める。

絵をよくし、二科展に入選、また、法政大学、慶應義塾普通部、桐朋中学・高等学校など数多くの校歌を作詞。

友人の小説家谷崎潤一郎の妻・千代に恋慕し、谷崎と千代子の離婚成立後、三人連名の挨拶状を知人・マスコミに送り、「細君譲渡事件」としてセンセーショナルな反響を呼び起こす。代表作である『秋刀魚の歌』は千代への思慕が背景にあると言われている。

作品に『病める薔薇』『田園の憂鬱』『都会の憂鬱』『西班牙犬の家』『お絹とその兄弟』『美しき町』『幻灯』『南方紀行 厦門探訪冊』など。

